

中野拓哉作 「おれの就職戦争」

<前編>

(効果音) (ドアのノック音)

面接官 A どうぞお入りください。

高野啓介 失礼いたします。青春大学経済学部、高野啓介と申します。よろしくお願い致します。

面接官 A あ、よろしく。履歴書、成績証明書等をお渡しくださってから、そこにおかけください。…ああ、どうぞ緊張せずに、リラックスしてくださいね。えーと、では早速ですが…。

(効果音) (大学キャンパスのガヤ)

藤井彰^{あきら} よう、啓介、久しぶり。

啓介 おう、彰、何が久しぶりだよ。お前、全然大学に顔見せてなかったじゃん。まったく、そんなんで卒業できんのかよ。あとで泣きついてきてもノートかしてやんないぞ。

彰 えー、そんな…。お前だけが頼りなんだから。おい、そんなことよりお前、就職どうした？

啓介 う、うん。一応活動はしてんだけど、やっぱ今年はうわさ以上にきついな。ダイレクトメールは200通以上、就職セミナー、会社訪問とか OB 訪問とかで回った会社は30以上。そのうち半分は受けてみたけど、いまだに内定なし。これからも10社くらいは予定しているけど…。お前は？

彰 おれは、活動はお前とおんなじくらいかな。一応3社内定してるけど、本命はこれから2、3社受ける予定なんだ。でもお前、おやじさんが伍代物産なんて超一流企業にいるんだから、コネで楽勝なんじゃないの？

啓介 まあ一応はね。でもできればコネは使わないほうがいいかなって思ってさ。そっか、お前、もう3社内定か。おめでとう。いいよなあ、1社くらい内定分けてほしいよ。(笑い)じゃおれ、これから就職課によってくから。学校ちゃんと来いよ。じゃあ。

彰 ああ。お互い就職頑張ろうな。じゃあ。

啓介ナレーション おれ、高野啓介。青春大学4年。一郎までして入った大学だったが、楽しかった大学生生活も終わりを告げようとしている。早々と就職を決め、残された学生生活を満喫しているはずだったこの時期が、うん悪くバブル経済崩壊のあおりを受けた平成不況のどん底に当たってしまって、まさかの就職難に直面している。そこそこの大学に入れたこともあり、また父親が一流企業ということもあってか、親の期待も大きい。このまま就職浪人になったら、親の周りへの体裁も悪いだ

ろう。

啓介

ただいま。

母貴子

お帰りなさい。あら、今日は面接の日じゃなかったの？

啓介

面接は明日。その次が就職セミナーで、来週は全部埋まってるから、今日は無理やり空けて学校のゼミに出てきたわけ。

母

そう。出、どこ受けるの？

啓介

明日のところは、友達の付き合いで受けるんだけど、小さなところで滑り止めの滑り止め。受かっても行く気はないけど、一応内定取っておけば、ほかを受けるときに余裕ができるじゃん。

母

ならいいけど、でも早くいいところの内定もらわないと、お父さんの会社のコネだって大変なのよ。コネは嫌だなんて言ってもらえないんだから。

啓介

ああ、分かってるよ。

ナレーション

父親の会社が嫌なのではなく、そこにコネで入ることが、どこか後ろめたいような気がして、おれは嫌だったのだ。とは言っても、やはり逃げ道があるという安心感があった。

小野真

おはよう、高野。

啓介

おっおー。真、遅いじゃないか。今日はおれが付き合っただけだからな。

真

おう、わりいわりい。まだ時間あるじゃん。今日のランチおごるから勘弁して。

啓介

ああいいけど。ところで今日のってどんなところなの？ おれなりに就職情報誌とか調べたんだけど、どこにも載ってなくて、お前から聞いたことしか知らないんだよ。詳しく教えて。

真

だからこの前言ったとおりで、福祉関係の事業をやっているところで、例えば障害者の施設や老人ホームの職員とか、そういった障害者が働ける場を探してきて提供したりする仕事なんだ。社会福祉法人って言って、普通の会社みたいに必ずしも営利目的じゃないけど、待遇とか将来的にも悪くないよ。

啓介

そうか。まあお前が選んだところだから、別に心配してないけど。

真

うん。高野が言う意味の、いい会社とは違うかもしれないけど、おれはやりがいのある仕事だと思っているよ。

啓介

そう。そうはそうと真はもうほかの会社とかで内定もらってる？ おれ、実はまだなんだよね。いざとなれば一応親父のコネもあるけど、できれば自力でいいところに入りたくって。

真

おれもまだどこも内定してないよ。っていうか、おれ、今日のところともう一つ同じようなところしか考えてないから。

啓介

何で？ お前くらい成績がよければ、かなりの会社で引っ張りだこだと思うよ。おれが真ならそんなもったいないことしないけど。お前なら、超大手企業だって夢じゃないぜ。

真 そうでもないけど、何のために就職するのかってよく考えた末、だれかのために
なりたいてって思って…。お、おい、ヤバいよ。遅刻しちゃうぜ。就職活動に遅刻
は厳禁だからな。

啓介 あ、ああ。そうだな。

啓介モノローグ ナレーション 何のために、なぜ就職するのか…。
その今まで気にも留めなかった言葉がやけに引っかかり、おれは無意識のう
ちに何度も自分に問い掛けていた。
その日の面接は、ほかの難関企業を多く受けていたおれにとって、マニュアル
どおりの何か物足りないくらいのもので、特に不合格になるような失敗は見当
たらなかった。数日たつうちに、試験や面接などの忙しさに紛れ、その日面接し
たことすら忘れ去っていた。それから2週間ほどたった日、学校で――。

彰 いよっ、啓介。就職のほうどうだった？

啓介 何だ、彰も来てたのか。それが全然でさあ、そろそろ一つくらい内定出てもよさ
そうなのに。お前のほうは？

彰 いやあ、実はおれ、第1希望の三菱銀行内定したんだ。

啓介 マジでえ!? やったじゃん、おめでとう。ていうことは…。

彰 そう。もう就職活動も要らないってわけ。あとは残された学生生活を目いっぱい
エンジョイするだけ。

啓介 そっかあ。でもいいよなあ。

彰 お前も早くコネで決めちゃえよ。とは言ってもお前、理想が高いからな。でもお
やじさんのところなら文句ないんじゃないの？ 何てたって天下の伍代物産なん
だからさあ。

啓介 お前だって一流企業じゃん。実はおれ、真剣におやじのところに頼もうかと思っ
てるんだ。

真 やあ、お二人さん。珍しくおそろいで何の悪巧み？ 草々、こちら聖研で一緒に、
4年の横山美恵子さん。

横山美恵子 初めまして。横山です。

真 そんなでこっちはおんなじクラスでよくツルんでる高野と藤井。

啓介、彰 ど、どうも。

彰 あの、セイケンって？

真 聖書研究会。

啓介 え、お前が!?

真 あれ、知らなかったっけ？ 3年の時にたまに顔出し始めて、今では毎週だよ。

啓介 ふーん。あ、今就職のこと話してたんだ。

真 で、内定出た？

彰 おれは第1志望の三菱銀行。銀行マンになりたかったから。

真 おめでとう。高野のほうは？

啓介 まだどこも…。一応真と一緒に受けたところは2次面接通知が来てたけれど、入る気ないから2次面に行くのやめようかと思って。そんで実は今、おやじの会社にコネで入るの真剣に考えているんだ。真はどうなの？

真 おれも通知が来たんだけど、もうひとつのほうの内々定出て、家から近いから決めちゃおうと思ってね。同じ福祉の仕事だから。

彰 横山さん…でしたっけ？ 就職のほうはどうですか？ 女子の採用って、男の比じゃなく大変なんでしょう？

美恵子 ええ、そうみたい。でも、わたし就職しないんです。

彰 ええ!? 就職しないって、もうあきらめちゃうほど大変なの？

美恵子 そういうわけじゃなくって、神学校に行こうと思って。

啓介 神学校？

真 そうなんだ。横山さんクリスチャンで、おれも時々横山さんの教会に連れてってもらってるんだ。神学校っていうのは、将来牧師や宣教師になるための学校。

美恵子 わたし、イエス様のために働きたいから。

啓介モノローグ イエス様の、ために？

ナレーション おれは、みんなの明るい顔がたまらなくねたましかった。特に横山さんの、あの確信に満ちて輝いた顔が。その時、あの問いが再びよみがえってきた。

啓介モノローグ おれはどうなんだ？ 何のために、なぜ働く？ だが今は、そんなこと考えてる場合じゃない。とにかくこの不安定な気持ちを消すには、内定を取ること。それにはもうおやじのコネしかない。

ナレーション だが、そのおやじの会社で、思いもかけない重大問題が起きているとは、この時のおれはまだ知る由もなかった。

<後編>

(音楽) (夢の中の感じ)

真 どうせ働くなら、食うためじゃなく、だれかのためになるような仕事がしたくて。

美恵子 わたし、イエス様のために働きたいの。

啓介 (夢から覚めて)ふわー。ああ、何だ夢か。寝ちゃったんだ。ああ！ もうこんな時間だ。夕飯片付けられちゃったかなあ。

(階下に)母さーん、おれの飯あるー？ あれ、だれもいないの？ (リビングに行く)何だ、母さんいるじゃん。どうしたの、電気もつけないで？ と、父さん。何だ、帰ってきてたのか。ど、どうかしたの？ 二人とも、何かあった…。

母 (わっと泣き出す)

啓介 どうしたんだよ、母さん？

父道夫 啓介、ちょっと来なさい。

ナレーション おやじの有無を言わさぬ言葉の強さに押されて、おれは書齋まで付いていった。向かい合ったおやじの顔は、今までに見たことがないほど疲れて老けて見えた。しばらく黙っていたおやじは、つぶやくように言葉を吐いた。

父 会社を、クビに…なった。

啓介 え？ 今父さん何て言った？

父 リストラだよ。物産系の会社は、50代のほとんどがそうだ。だが本社のわたしまでが…。まさかとは思っていたが、現実になるとは…。ここまで30年間、まじめに勤め上げ、定年まで変わらぬ忠誠を誓った会社に、こうも簡単に捨てられてしまうとは…。

啓介 …そ、それ本当なの？

父 ああ。す、すまない。お前をうちの会社に入れてやることもできなくなってしまった。それどころか明日からの生活もままならない。もちろんしばらく食っていくことぐらいは何とかなるが。

ナレーション その言葉を最後にふさぎ込んでしまった父に何にも言えず、そっと書齋をあとにしたおれは、自分の部屋のベッドに力なく倒れ込んだ。おやじのクビもショックだったが、それ以上に自分の未来も全く見えなくなってしまったショックは、2日後の面接試験の時にも消えなかった。

(効果音) (ドアのノック音)

面接官 B どうぞお入りください。

啓介 失礼いたします。青春大学経済学部、高野啓介と申します。よろしくお願ひします。

面接官 B よろしく。では早速ですが、なぜ当社を志望しましたか？ 動機を率直に教えてください。ただしありふれたのは聞き飽きていますから、その辺を正直にお答えください。

ナレーション その時とつさに、真理たちと話してた時のことが頭をかすめた。

啓介モノローグ (エコー)なぜ？ 何のために？

啓介 あ、あの一、その一。私が御社を志望したのは、…その一。

面接官 B どうしましたか？ 基本的な質問ですよ。緊張なさらずリラックスして。

啓介 は、はい。そ、その一…。

面接官 B 分かりました。もう結構です。結果は後日郵送しますので…。

ナレーション 結果など見なくても分かり切っていた。おやじの会社のコネはもう可能性ゼロなのだから、余計なことは考えずに頑張らなければならないのに、分かっているがらどうしようもなかった。

数日後、学校で――。

彰 どうした？ 元気なさそうだな。…啓介、聞いているのかよ、おい。

真 た、か、の！

啓介 ああ、お前らか。ごめん、ちょっと考えごとしてて。

真 どうした？ 顔色悪いぞ。

彰 就職のほうはどうした？ お前のこと心配してんだからな。おやじさんのコネの話はどうなった？

啓介 んー…。実はさあ…。

ナレーション 彼らに会うまでは、いくら中のいいこいつらでも話せないと思っていたが、いざ声をかけられて、心配そうな顔を見たら、なぜか自然と隠さずにすべてを話せた。

真 そっかあ。家族もこれから大変だなあ。でも今一番ヤバいのはお前だろう。これからどうすんだ？ 就職とか。

啓介 分からない、自分でもどうしたらいいのか。それにおれは何のために就職するのか、今まで全然考えたこともなかったけど、今ごろやけに気になりだしてさあ。でも、それも答えが見つからない。家に帰ってもおやじは昼間っから酒飲んでるし。母親も朝から晩までパートに行きだして相談をするどころじゃないし…。

美恵子 あら、真君たち。ちょうどよかった。聖書研究会始まるわよ。

真 うん、今行く。あ、そうだ啓介、お前もちょっと付き合えよ。実は彰を誘ってこれから聖研に行くところだったんだ。いいよな？ どうせ今日はこれから何も無いんだろ？ さあ行こう。ほら、彰も急いで。

啓介 お、おい、ちょっと…。

真 いいのいいの。さあ早く！

ナレーション 導かれるままについていったところは、小さな部屋に 7、8 人。その中に横山さんもいた。

真 もう始まってから一応静かに入ってよ。

美恵子 今日わたし司会だったわよね。えーと、今日は詩篇の 37 篇です。

ナレーション それから、その聖書の輪読が始まった。何となく場違いな気もしたが、かといって別にいづらい雰囲気でもなかった。

美恵子 来ていきなりで悪いんだけど、高野君、5 節を読んで。

啓介 あ、はい。えーと…。「あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる。」

美恵子 “主”というのは神様のことであり、神の子イエス様のことよ。

啓介 「あなたの道を主にゆだねよ。」その初めて読んだ聖書の 1 行が、集会の間中、妙に心に残った。その帰り道――。

真 どうだった？ 別に楽しいとは思わなかったかもしれないけど、苦でもなかっただろ？

彰 うん。おれが想像してたのより、よかったよ。

啓介 うん、おれもよかった。イマイチよく分かんないところもあったけど。

美恵子 (オフから) 真くーん、待ってえ！(オンで) 高野君と藤井君、どうだったって、聖書研究会？

真 二人とも、そんなに悪くなかったって。なあ。

啓介、彰 ああ。

美恵子 そう、よかった。実はね、今日読んだ聖書のところはわたしも好きなところなんだけど、大学出て殻の進路を決めたのも、さっきのところがきっかけだったのよ。就職しようかどうか迷っていた時に、わたしの教会の牧師先生に神学校のこと勧められて、はじめは全然そんなこと思ってもいなかったんだけど、気になりだしたところに、あの箇所に出会ったの。特に、そう、高野君が読んだところ、「あなたの道を主にゆだねよ。」聖書っていうのは、何千年も前に書かれた書物に過ぎないと思うかもしれないけど、それだけじゃなくて、今もお神様がわたしたち一人一人に語りかけてくださっている言葉なの。だからまさにこの“あなた”っていうのは、例えば高野君だったりするわけ。だからこのみ言葉を読んだ時、わたしは迷わず神様のために働こうって思ったの。あ、ごめんね、つまらない話しちゃって。よかったらまた来週も来てよ。じゃあ、わたしはこれで。

彰 ふーん、そうだったんだ。

真 おれも知らなかった。

彰 ああ、ヤベえ。おれ、この次の授業の出席リーチかかってたんだ。ごめん、行かなくちゃ。またな。

真 そう言えば啓介、おれと一緒に受けたところ、確か明日2次面接だったよなあ。ほら、あの福祉関係の。

啓介 ああ。2次は受けなつもりでいたけど、今、受けてみようかなと思ってる。ほかに行くところないからとかじゃなくて、おれなりに考えて、もしかしたらこれがその、“神様にゆだねる”ってことかなと思って。

真 いや、それって正解だと思うよ。お前にとって最善の道に導いてくれる神様に全部任せちゃうんだ。じゃあ、明日頑張れよ。祈ってるから。

ナレーション 次の日、面接会場に行ったおれは、不思議なほど心が軽かった。何となく、目に見えない神が、いいように導いてくれるような気がしたからだ。おれのことも、家族のことも。

啓介モノローグ 「あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる…。」

ナレーション おれは、心の中で何度もそうつぶやいていた。

<完>